

佐賀方言における介入効果について*

－ 韻律と情報構造の観点から－

日 高 俊 夫

1 はじめに

(1) が示すように、否定極性表現 (NPI)、選言要素、焦点化マーカー、ある種の量化表現は、表層で wh 要素を構成素統御する位置に生起できない (wh 要素を文頭に移動させると容認性が改善する)。

- (1) a. ?* 誰も何を読まなかったの? cf. 何を誰も読まなかったの?
b. ?? 誰もが何を読んだの? cf. 何を誰もが読んだの?
c. ?? 誰かが何を読んだの? cf. 何を誰かが読んだの?
d. ?* ジョンしか何を読まなかったの? cf. 何をジョンしか読まなかったの?
e. ??? ジョンかビルが何を読んだの? cf. 何をジョンかビルが読んだの?

(Tomioka, 2007)

この現象は、元来、LF において wh 要素が文頭に移動することが、「誰も(が)」や「ジョンしか」等が介入することによって阻止されるという意味で「介入効果」(Intervention Effect) と呼ばれ、Hoji (1985) 以来、統語 (Hagstrom (1998)、Pesetsky (2000) 等)、意味 (Beck (2006) 等)、韻律と情報構造 (Tomioka (2007)、Eilam (2009) 等) の面から説明が試みられてきた。

ところで、(1) は東京方言における現象であるが、対照的に、それに相当する次の佐賀方言¹の文では、介入効果がはたらかない (wh 要素を文頭に移動しても容認性は変わらない)。

¹ 本論における「佐賀方言」とは、佐賀市を中心とした、いわゆる無アクセント方言に分類されるものを指す。

- (2) a. だいでん何ば読まんやったと？ cf. 何ばだいでん読まんやったと？
b. だいでん何ば読んだと？ cf. 何ばだいでん読んだと？
c. だいじゃい？(が) 何ば読んだと？ cf. 何ばだいじゃい？(が) 読んだと？
d. ジョンしか何ば読まんやったと？ cf. 何ばジョンしか読まんやったと？
e. ジョン{じゃい / こっちゃい}ビルが何ば読んだと？
cf. 何ばジョン{じゃい / こっちゃい}ビルが読んだと？

本論の目的は、なぜ東京方言と佐賀方言でこのような容認性の違いが生じるかを明らかにすることである。具体的には、佐賀方言と同様に介入効果がはたらかないとされるアムハラ語を分析した Eilam (2009) を踏まえ、(1)と(2)を統一的に説明するには、Tomioka (2007) らの主張する韻律と情報構造の対応に基づく分析が妥当であることを示す。

本論の構成は次の通りである、まず、第2節で、本論の分析の拠り所となる Tomioka (2007) と Eilam (2009) の内容を簡単に紹介する。その後、第3節で、本論の分析対照である佐賀方言の一般的な韻律構造を概観し、第4節で佐賀方言における介入効果に対する具体的分析を提示する。最後に、第5節で、本論の分析が佐賀方言において東京方言と異なる容認性を示す他の現象を分析する際にも応用できる可能性があることを示唆する。

2 Tomioka (2007), Eilam (2009)

2.1 Tomioka (2007)

本節では、(1)に見られるような、東京方言における介入効果を韻律と情報構造の面から説明した Tomioka (2007) の論を紹介する。

まず、情報構造について概観する。Vallduví (1990, 1995) によれば、文は focus と ground から成り立っており、後者はさらに link と tail に分けられる。link とは、先行文脈とその発話をつなぐものであり、tail はその他

の部分である。さらに、Tomioka (2007) は「主題マークされた句は link である」とする。それによれば、wh- 疑問文の情報構造は、例えば次のように表される。

- (3) 健は 何を 食べたの？
link (ground) focus tail (ground)

文の韻律構造について、Tomioka (2007) は、次の Pierrehumbert and Beckman (1988) のモデルを援用して説明している。

- (4) a. ν (発話) — ιP (中間句: intermediate phrase, major phrase) — αP (アクセント句: accentual phrase, minor phrase) — PrWd (韻律語)
— F (foot) — σ (音節) — μ (モーラ) — s (segment) — π (音韻素性)

この中で、本論に大きく関連するのは、 ν 、 ιP および αP である。 ιP 、 αP は、それぞれ次のように定義づけられる。

- (5) a. ιP : ある種の統語構造を反映し、downstep が再帰的に起こるレベル (ιP 境界でリセットされる)
b. αP : 語彙的に指定されているアクセント核が基本メロディによって実現されるレベル (松井 (2011) より)

韻律構造と情報構造の対応について、Tomioka (2007) は、次の Nagahara (1994) のモデルを用いて説明している。

- (6) a. FOCUS-LEFT-EDGE (Pierrehumbert & Beckman, 1988): Left edge of focus = left intermediate phrase edge

- b. FOCUS-TO-END: No intermediate phrase boundary intervening between any focused constituent and the end of the sentence.

(Nagahara, 1994)

(6)により、統語構造上の焦点要素が韻律構造上の中間句の始まりに対応し（それ以前は別の中間句に入り）、焦点以降文末までの韻律が低く抑えられ、1つの中間句を成す。

以上のことに基づいて、Tomioka (2007) は介入効果について次のような説明をしている。

- (7) a. 介入効果を引き起こすのは Anti-Topic Items (ATIs) である。

*誰もは、*誰かは、*ジョンカビルは、*ジョンもは、*ジョンしかは

- b. wh 疑問文では、wh 要素が焦点になるので、結果、ATI を含む残りの部分が ground に含まれなければならないはずだが、語彙的性質上、ATI は link にはなれない。また、wh 句の左の位置は韻律上抑制されないために tail にもなれない。

- c. ATI はその認可要素と同じ中間句 (Pierrehumbert & Beckman, 1988) 内にある必要があるが、介入効果の観察される文ではそうっていない。

(b) に加えてこの制約にも違反するため、NPI は強い介入効果を示す。

- d. wh 要素（焦点および韻律上の卓立を担う）が文頭にあると、以降の韻律が低く抑えられ、ATI も tail に含まれる。また、全体が1つの中間句となるため介入効果がキャンセルされる。

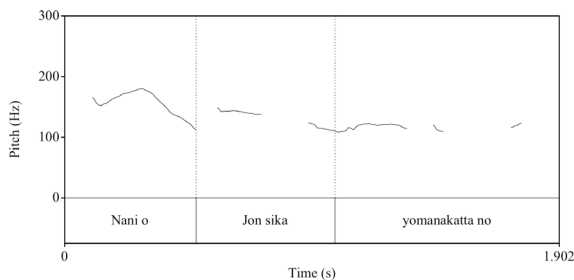
(7)により、次のような文の容認性の違いが説明される。

- (8) a. ジョンしか何を読まなかったの？

*[_v [_{IP} [_{αP} ジョン**しか**]][_{IP} [_{αP} なにを]][_{αP} よま**なかったの**]]

b. 何をジョンしか読まなかったの？

[_v [_{ιP} [_{αP} なにを]][_{ιP} [_{αP} ジョンしか]][_{αP} よま**な**かったの]]



(7)に沿って(8)を説明すると次のようになる。

(9) a. (8a, b)には「ジョンしか」という ATI が含まれている。

b. wh 句「何を」が焦点になるので、残りの部分が ground に含まれなければならないはずだが、語彙的性質上、ATI「ジョンしか」は link にはなれない。また、wh 句の左の位置は韻律上抑制されないために、(8a)では「ジョンしか」は tail にもなれない。

c. ATI「ジョンしか」はその認可要素と同じ中間句内にある必要があるが、(8a)ではそうっていない。(b)に加えてこの制約にも違反するため、(8a)において、NPI「ジョンしか」は強い介入効果を示す。

d. (8b)では、wh 要素(焦点および韻律上の卓立を担う)が文頭にあるため、以降の韻律が低く抑えられ、ATI「ジョンしか」も tail に含まれる。また、全体が1つの中間句となるため介入効果がキャンセルされる。

以上のような理由で、東京方言においては介入効果が観察されると Tomioka (2007) は述べている。

次節では、基本的に Tomioka (2007) と同様の分析をもってアムハラ語において介入効果が見られないことを説明した Eilam (2009) を概観し、その後に、

本論の分析対象である佐賀方言の韻律と情報構造について考察する。

2.2 Eilam (2009)

Eilam (2009) によれば、(10) – (12)が示すように、東京方言におけるような介入効果がアムハラ語では見られない（以下のアムハラ語のデータはすべて Eilam (2009) による）。

- (10) a. mannəmm mən al-anäbbäb-ä-mm
 anyone what NEG-read.PER-3MS-NEG
 b. mən mannəmm al-anäbbäb-ä-mm
 ‘What did no one read?’
- (11) a. hullumm mən/yätəññaw-ən mäs’haf anäbbäb-u?
 everyone what/which-ACC book read.PER-3MPL
 b. mən/yätəññaw-ən mäs’haf hullumm anäbbäb-u?
 ‘What/which book did everyone read?’
- (12) a. haile bəčča mən anäbbäb-ä?
 Haile only what read.PER-3MS
 b. mən haile bəčča anäbbäb-ä?
 ‘What did only Haile read?’

Eilam (2009) は、Tomioka (2007) の「wh 句の左は韻律上抑制されないために tail にはなれない」という考えに対して、相対的な位置というよりも、intervener そのものの韻律的卓立が重要であることを主張している。そして、アムハラ語において介入効果が見られない理由を、アムハラ語は介入効果を示す言語と異なる情報構造もしくは韻律構造（あるいはその両方）を持つため

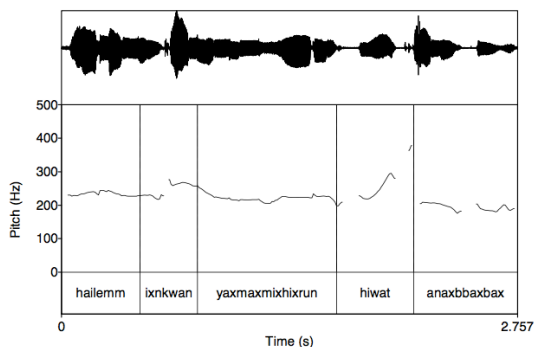
あるとしている。

Eilam (2009) によれば、アムハラ語における特徴的な韻律として、次のようなことが挙げられている。

- (13) a. focus particle がついた語句も focus particle そのものも pitch prominence を伴わない。
 b. 通常、ATI が韻律上の卓立を受けず、tail (の一部) として解釈可能である。

(14)は(13a)を示す例である。

- (14) haile-mm ənk^Wan ya-māməh ər-u-n hiwat anäbbäb-ä.
 Haile-FOC even POSS-professor-DEF-ACC life read.PER-3MS
 ‘Even Haile read “The Life of the Professor”.’



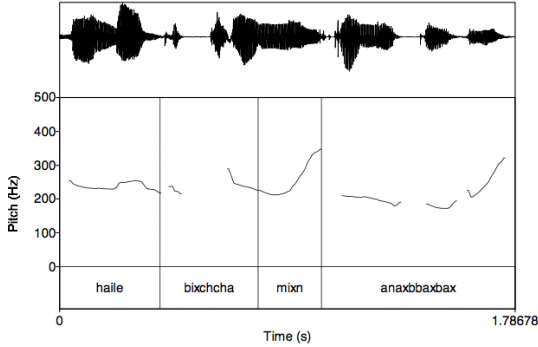
(14)では、東京方言の「さえ」と異なり、焦点を担う haile-mm が韻律的な卓立を示していない。

次に、(13b)を示す例として、(15)が挙げられる。

(15) haile bəčča mən anäbbäb-ä?

Haile only what read.PER-3MS

‘What did only Haile read?’



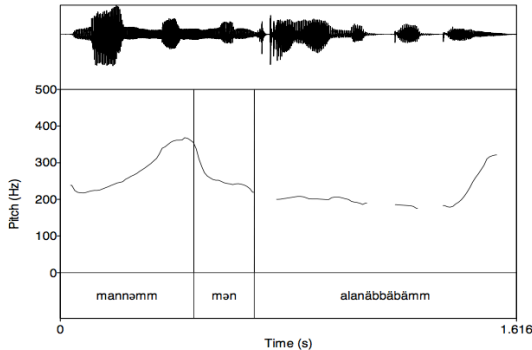
(15)では、ATIである haile bəčča が韻律上の卓立を受けないので、tail (の一部) として解釈可能であるとされている。

ただし、次の例が示すように、NPI は韻律的に低くならないため tail として解釈されにくいので、wh-in-situ では若干容認性が下がる (Wh 句に pitch peak がないのは PFR が原因) とされる。

(16) ?mannəmm mən al-anäbbäb-ä-mm

anyone what NEG-read.PER-3MS-NEG

‘What did no one read?’



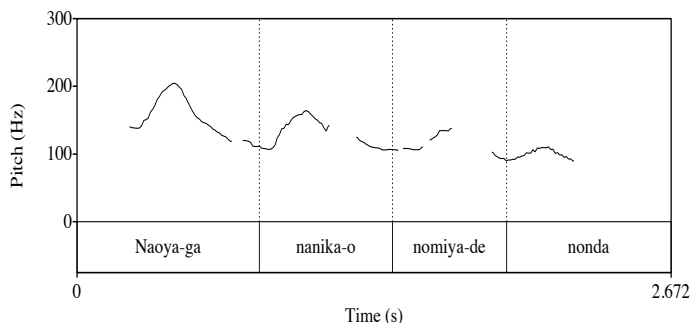
3 佐賀方言の韻律特性

次節で佐賀方言の介入効果を分析するための下準備として、本節では、佐賀方言の一般的な韻律特性と、韻律と情報構造の対応をごく簡単に述べた後、wh-疑問文の韻律構造を観察する。

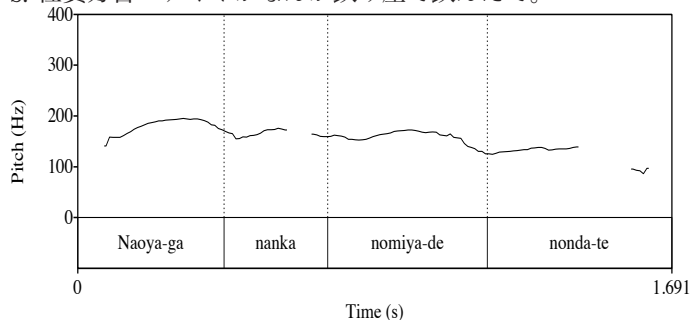
3.1 基本的音調パターンと韻律構造

佐賀方言は熊本方言(前川, 1992)と同様無アクセント方言であり、アクセントによる語の弁別機能がなく、1型アクセントの福岡方言とも異なり、アクセント核は任意に付与される。また、次の音調曲線が示すように、文レベルでも、東京方言等と比べると、全体的に平坦な韻律を持つ。

- (17) a. 東京方言：ナオヤが何かを飲み屋で飲んだ。



- b. 佐賀方言：ナオヤがなんか飲み屋で飲んだて。



松井 (2011) は、このような韻律的な特徴を持った佐賀方言における韻律構造と統語構造の対応関係について次のように述べている。

(18) 佐賀方言における統語構造と韻律構造の対応

- a. 佐賀方言は発話 (ν) が 1 つの中間句 (ιP) にまとまることを好む。
- b. したがって、中間句 (ιP) よりむしろアクセント句 (αP) が統語構造と密接な関係を持つ (東京方言では中間句 (ιP) が統語構造と密接な関係を持つ)。
- c. 佐賀方言におけるアクセント句は、東京方言よりも広い範囲に及ぶことが多い。

(松井, 2011)

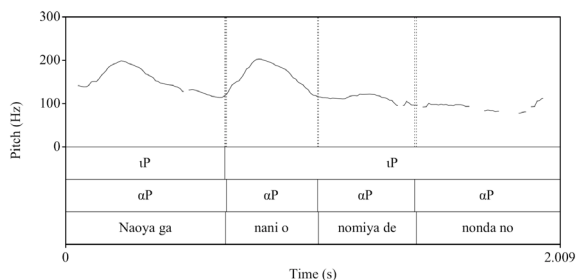
つまり、東京方言と異なり、佐賀方言においては、中間句 (ιP) という韻律レベルが実質的に統語構造と関連性を持たず、韻律構造上、発話 (ν) と中間句 (ιP) が等価になるので、東京方言よりも韻律構造の階層の数が実質 1 つ少なくなり、2 層構造という比較的単純な構造になる。

3.2 wh- 疑問文の韻律構造

(19a) のような東京方言における -wh 疑問文の韻律構造は (19b) のように表すことができる。

(19) a. ナオヤが何を飲み屋で飲んだの？

b. [ν [ιP [αP ナオヤが]] [ιP [αP なにを] [αP のみやで] [αP のんだの]]]



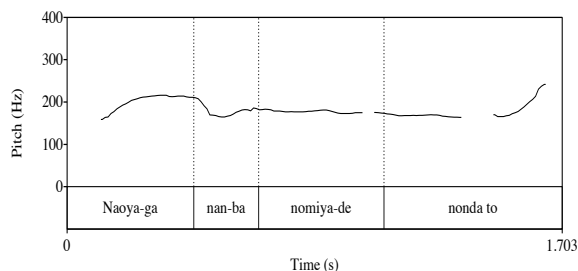
東京方言において、「何を」は焦点解釈に伴う韻律的卓立を示すはずであるが、F0のダウンステップと相殺し合い、 ιP の2つめの要素であるにもかかわらず、「ナオヤが」とほぼ同じ高さになっている。そのことを除けば、全体としてはきれいなダウンステップを示しており、示された音調曲線は(19b)の韻律構造を裏づけるものとなっている。

一方、(19a)に相当する佐賀方言の-wh疑問文(20a)の韻律構造は(20b)もしくは(20c)のように表すことができると考えられる。

(20) a. ナオヤが何ば飲み屋で飲んだと？

b. [_v [_{ιP} [_{αP} ナオヤが] [_{αP} なんばのみやでのんだと]]]

c. [_v [_{ιP} [_{αP} ナオヤがなんばのみやでのんだと]]]



無アクセント方言である佐賀方言に特徴的な韻律として、先述した「全体的に平坦な韻律を持つ」ということの他に「wh要素が日wh要素と比べて韻律的な卓立を伴うことがない」ということが挙げられる² (西垣内・日高, 2013)。

また、佐賀方言では発話全体が中間句(ιP)に対応する(松井, 2011)ということ的前提に全体的な韻律を見てみると、「なんば飲み屋で飲んだと」の部分がアクセント句(αP)を成しているのかが判然としない。もしその部分がアクセント句(αP)を成しているとする(20b)のような韻律構造になる。ただし、

² 母語方言話者としての筆者の直感ではむしろ通常の語句よりも低く沈み込むような印象がある。

長崎市方言の韻律を分析した佐藤(2016)によれば、長崎市方言における次のような文では、補文全体が韻律上は複合語(アクセント句(αP))を成す³。

(21) だいがミカンば食うてもよか(誰がミカンを食べてもよい)

[_v [_{IP} [_{αP} だいがミカンばくうても] [_{αP} よか]]]

このことから考えて、wh 要素がアクセント核を持たない佐賀方言⁴においては、(20a)のような文は、文全体が韻律上の複合語(アクセント句(αP))を成している可能性もあり、その場合は(20c)のような、非常に単純な韻律構造になると考えられる。

以上、本節では、佐賀方言の基本的な韻律構造および韻律構造と統語構造との対応関係に関して述べた。本節の内容を含むこれまでの論を前提に、次節では、本論の分析対象の中核を成す、佐賀方言における介入効果(がないこと)を説明する。

4 佐賀方言における介入効果

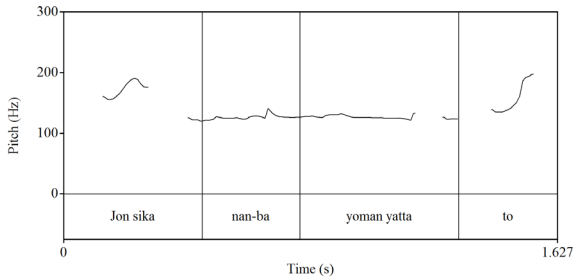
本論冒頭で述べたように、東京方言における介入効果が佐賀方言では観察されない((22)として再掲する)。

- (22) a. だいでん何ば読まんやったと? cf. 何ばだいでん読まんやったと?
 b. だいでん何ば読んだと? cf. 何ばだいでん読んだと?
 c. だいいじゃい?(が)何ば読んだと? cf. 何ばだいいじゃい?(が)読んだと?
 d. ジョンしか何ば読まんやったと? cf. 何ばジョンしか読まんやったと?
 e. ジョン {じゃい / こっちゃい} ビルが何ば読んだと?
 cf. 何ばジョン {じゃい / こっちゃい} ビルが読んだと?

(22)に挙げられた文のうち、本節では(22d)の文を分析するが、他の例についても同様の説明が可能であると思われる。

これまで述べてきた、佐賀方言における韻律構造と統語構造の対応関係に基づくと、(22d)の文は次のような韻律構造と情報構造を持つと考えられる⁵。

- (23) a. [_v [_{tP} [_{αP} ジョンしか] [_{αP} なんば よまんやったと]]]
 FOC (Phon) FOC (SynSem) tail
- b. [_v [_{tP} [_{αP} ジョンしか なんば よまんやったと]]]
 FOC (Phon) FOC (SynSem) tail



佐賀方言で介入効果が観察されないことを、(7)で挙げた Tomioka (2007)、および Eilam (2009) に並行する形で説明すると(24)のようになる。その中心的な役割をしているのは「佐賀方言では wh 要素が韻律的卓立を伴わない」という

³ (21)における *tP* の範囲は便宜的なものであり、論理的可能性としては「よか」だけで *tP* を成す可能性もあるが、本論とは直接の関連を持たないものと考えられる。

⁴ 長崎市方言では wh 要素は基本的にアクセントを持つ。

⁵ 「FOC (Phon)」は音韻的な焦点、「FOC (Synsem)」は統語的・意味的焦点を表す。この、焦点を音韻と統語・意味に二分する概念そのものが妥当かどうかは今後の課題であるが、東京方言がその2つが分かち難く結びついているのに対して、佐賀方言の場合はそれが別々のものとして実現可能であると仮定すると、東京方言と異なる佐賀方言の他の現象を統一的に説明できる手がかりになるかもしれない。また、「なんば」は統語的・意味的には焦点になるが、韻律上の焦点とはみなされない。Tomioka (2007) らの説明との整合性を考えると、統語的・意味的な焦点が tail として解釈され得るということになるが、そのことをどう理論的に位置付けるべきかは今後の課題である。

ことである。

(24) a. 佐賀方言では ATI が介入効果を示さない。

b. wh 疑問文では、wh 要素は形態統語的・意味的焦点にはなるが、韻律上の卓立を受けない。東京方言と同様、ATI は語彙的性質上 link にはなれないが、東京方言と違って wh 要素が韻律上抑制されるので、発話全体が 1 つの中間句（もしくはアクセント句）にまとまる。つまり、韻律上は ATI が焦点的に⁶、wh 句を含む残りの部分が tail 的に機能できるため介入効果が見られない。

c. ATI はその認可要素と同じ中間句内にある必要があるが、佐賀方言では wh 要素が韻律的卓立を担わないので、wh 要素 (in situ) が中間句の始まりに対応しない。その結果、文全体が 1 つの中間句（もしくはアクセント句）となり、NPI およびその認可要素が共にそこに含まれるため、NPI に関しても介入効果は観察されない。

wh 要素を文頭に移動した場合の韻律構造および情報構造は、次のようになると考えられる。

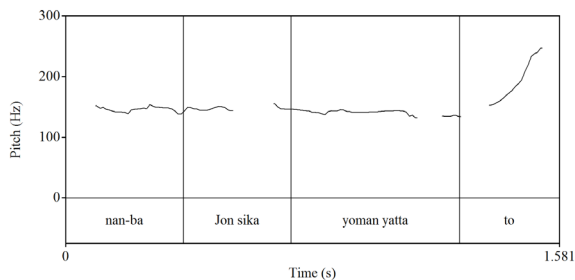
(25) a. なんばジョンしか読まんやったと？

b. [_v [_{iP} [_{αP} なんば] [_{αP} ジョンしか よまんやったと]]]

FOC (SynSem) FOC (Phon) tail

c. [_v [_{iP} [_{αP} なんば ジョンしか よまんやったと]]]

FOC (SynSem) FOC (Phon) tail



「ジョンしか」はダウンステップの影響を受けて韻律上卓立せず、中間句（もしくはアクセント句）の始まりに対応しない。その結果、やはり文全体が1つの中間句（もしくはアクセント句）となり、ATIが東京方言と同様 tail に含まれるため容認される。

以上、佐賀方言において介入効果が見られない主要因は、佐賀方言が無アクセント方言であることと wh 要素が韻律上卓立しないことであることを述べた。Eilam (2009) では、アムハラ語において介入効果が見られない原因は、本論(3)で紹介したように、通常焦点を担うと考えられる ATI が韻律上の卓立を受けず、tail (の一部) として解釈可能であることであつた。その一方で、wh 要素は、通常、韻律上の卓立を受ける。これらを考え併せると、佐賀方言とアムハラ語において介入効果が見られない要因は、前者が wh 要素が韻律上卓立しないことによって、後者が ATI が卓立しないことによってという違いはあるものの、そのことによって、両者共に、介入効果が回避されるような韻律構造および情報構造を形成することができるためであると言える。

また、東京方言同様、佐賀方言でも wh 要素は統語的・意味的焦点だと考えることは自然であり、両方言の統語構造が著しく異なるとは考え難い。Eilam (2009) の論や、Drubig (2003) の「形態統語的・意味的な焦点と韻律上の卓立

⁶ すべての ATI がこのように振る舞うとは限らず、アムハラ語同様に tail として解釈されるものがある可能性もあるが、詳細は今後の課題である。

がそれぞれ独立したものである」ということが正しいとすれば、介入効果の主要因となっているのは、統語的・意味的なものというよりも、むしろ、wh 要素や焦点要素が担う韻律上の特性と、それに伴う情報構造であることが示唆される。

5 Implication

本論の分析が正しいとすれば、焦点句もしくは wh 要素が韻律的に卓立しない言語は介入効果を示さないと予測することになる。その妥当性は今後の検証を待つより他はないが、本節では、本論の分析に基づけば、東京方言とは異なる、佐賀方言における他の現象に対しても説明を与える可能性があることを述べる。

5.1 優位性条件？

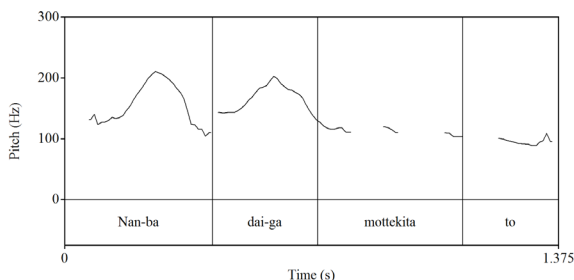
佐賀方言には、(26)に示すように、一見、「優位性条件」(superiority) の効果があるように見える現象がある（西垣内・日高, 2013）。

- (26) a. だいがなんば持ってきたと？（cf. 誰が何を持って来たの？）
b. ?*なんばだいが持ってきたと？（cf. 何を誰が持って来たの？）

東京方言では「誰が何を」を「何を誰が」としてもペアリストの解釈に影響を与えるほどではない。一方、佐賀方言では、通常の韻律（wh 句が韻律上卓立せず、全体が平坦な韻律）で(26b)を発音すると、ペアリスト解釈も含めて、いずれの意味にも解釈しにくく、東京方言の対応する文に比べて容認性が低い。

ただし、佐賀方言においても(26b)が自然に解釈可能な韻律が存在する。それは次の音調曲線が示すように、東京方言と同様に「なんば」と「だいが」がそれぞれアクセント核を持ち、韻律上の卓立を受けた場合である。

(27)



しかしながら、この韻律では、ペアリスト解釈に伴い、必ず問い詰めや聞き返しといった別の語用論的機能が付随することが東京方言との違いである⁷。そのことを考え合わせると、この場合、単にかき混ぜが起こっているというよりもフォーカスやフォースに関する移動が関係していると考えられる。ペアリスト解釈の必要条件が wh 要素の韻律的卓立であるとするならば、佐賀方言における通常の韻律の場合、その文が容認されにくく、東京方言では問題なく容認されることが自然に導出される。

5.2 Sluicing

次の例が示すように、東京方言ではスルーシングが可能であるが、それに対応する佐賀方言の文では容認性が落ちる。

- (28) a. 健がその店で何かを買ったらしいが、僕は何をか(を)知らない。
 b. ?*健がその店で何 {じゃい / こっちゃい} (ば) 買うたらしかバッテン、おいは何ばこっちゃい (ば) 知らん (もんね)。

スルーシングが、TP 内の焦点以外の部分を削除することによってなされ、その削除の条件が焦点解釈に伴う wh 要素の韻律的卓立であるとするならば、

⁷ もちろん、ペアリスト以外の解釈も可能である。

wh 要素の意味的な焦点と韻律上の卓立が連動しない佐賀方言ではスルーシングが難しいことも説明できるかもしれない。

5.3 Wh 島の制約

(29)、(30)が示すように、東京方言では、Wh 島の制約がはたらかないのに対して、佐賀方言では同制約がはたらいているように思われる。

(29) a. ナオヤは [マリが誰に会ったか] 今でも知りたがっているの？

(YesNo / Wh)

b. ナオヤは [マリがだいに会ったこっちゃい] 今でん知りたがととと？

(YesNo のみ)

(30) a. 誰にナオヤは [マリが会ったか] 今でも知りたがっているの？

(Wh 優勢)

b. ?*だいにナオヤは [マリが会ったこっちゃい] 今でん知りたがととと？

(基本的に YesNo のみ)

(30b)の佐賀方言の文の韻律は、通常、補文の終わりで中間句が終わり、「今でん」で再び高くなる Short EPD (Deguchi & Kitagawa, 2002) であり、解釈も YesNo 疑問文となるが、それでも容認性は下がる。また、この文に相当する東京方言(30a)に対して Wh 解釈がなされる場合、韻律としては、「誰に」から文末にかけてずっとダウンステップが続く Long EPD (Deguchi & Kitagawa, 2002) として発音される。佐賀方言でも Long EPD に似た音調、つまり、「今でん」の部分で上がらず、文頭から文末直前までずっと低く抑えられて、最後の「ととと」で急激に上がるような音調が絶対に不可能というわけではないという直感はある、その際は wh 解釈が不可能ではないようにも思われる。しかし、実際にそのように発音されることはなく、もしそう発音した場合、非常に

不自然な発音であるとも感じられる。これは文頭から文末までを1つのアクセント句(α P)として処理するには長すぎるということが原因なのかもしれない。

5.4 まとめ

以上、本節では、佐賀方言における介入効果に対する本論の中心概念の1つである韻律構造が、東京方言と異なる容認性を示すその他の佐賀方言の現象を説明する鍵になる可能性を探った。もちろん、これらの現象が本当に韻律構造(およびそれに伴う情報構造)の面から説明できるかどうかを示すためにはそれぞれの現象を詳細に分析していく必要があるが、それは今後の課題としたい。

* 本論の内容は、日本言語学会第152回大会(2016年)での口頭発表に基づいている。また、全体的な議論に関しては、国立国語研究所共同研究プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」(2013年度-2015年度)における議論がもとになっている。リーダーの金水敏先生、アムハラ語の現象に関する情報をいただいた富岡論先生、プロジェクトメンバーの方々、大会や研究発表会で質問・コメント等をいただいた皆様に感謝いたします。もちろん、本論における誤りや理解不足に関する責任はすべて筆者一人が負うものである。

参考文献

- Beck, Sigrid. (2006). Intervention effects follow from focus interpretation. *Natural Language Semantics*, 14 (1), 1-56.
- Deguchi, Masanori. & Kitagawa, Yoshihisa. (2002). Prosody and Wh-questions. In Hirotani, Masako. (Ed.), *Proceedings of the Thirty-second Annual Meeting of the North Eastern Linguistic Society*, pp. 73-92.
- Drubig, Hans Bernhard. (2003). Toward a typology of focus and focus constructions. *Linguistics*, 41 (1), 1-50.
- Eilam, Aviad. (2009). The absence of intervention effects in Amharic: Evidence for a non-structural approach. *Brill's Journal of Afroasiatic Languages and Linguistics*, 1 (1), 204-254.

- Hagstrom, Paul Alan. (1998). *Decomposing questions*. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of Technology.
- Hoji, Hajime. (1985). *Logical form constraints and configurational structure in Japanese*. University of Washington.
- Nagahara, Hiroyuki. (1994). *Phonological phrasing in Japanese*. Ph.D. dissertation, University of California Los Angeles.
- Pesetsky, David. (2000). *Phrasal movement and its kin*. MIT Press.
- Pierrehumbert, Janet. & Beckman, Mary. (1988). *Japanese Tone Structure*. MIT Press.
- Tomioka, Satoshi. (2007). Pragmatics of LF intervention effects: Japanese and Korean Wh-interrogatives. *Journal of Pragmatics*, 39-9, pp. 1570–1590.
- Vallduví, Enric. (1990). *The informational component*. Ph.D. dissertation, University of Pennsylvania.
- Vallduví, Enric. (1995). Structural properties of information packaging in Catalan. In *Discourse configurational languages*, pp. 122–152.
- 佐藤久美子 (2016). 「長崎市方言における不定語を含む語・文の音調と複合法則」. 『日本言語学会第 153 回大会予稿集』, pp. 390–395. 日本言語学会.
- 西垣内泰介・日高俊夫 (2013). 「Wh 構文の解釈と韻律構造—佐賀方言と東京方言の対象—」. TALKS, 16, 99–116.
- 前川喜久雄 (1992). 「熊本無アクセント方言のイントネーション」. 『月刊言語』, 21 (9), 66–74.
- 松井理直 (2011). 「音韻部門における統語的焦点素性の韻律解釈」. TALKS, 14, 45–80.